

豊かな体験活動「みんなで取り組む食と農」

鹿児島県川辺町立高田小学校

はじめに

本県では、「鹿児島ならではの豊かな自然環境や教育的伝統などを生かした体験活動を推進する」ことを重点事項に掲げ、郷土の自然や文化、伝統・歴史、産業等を知ることにより、郷土への理解を深め、郷土への愛情や誇りを持ち、そのよさを守り伝え、郷土の発展に主体的に貢献することができる資質や能力の育成をめざしている。

本校では、家庭や地域、関係機関と連携を図りながら、基幹作物である米や大豆、野菜の栽培と牛・豚・鶏の飼育が盛んな地域の特性を背景に、農業や地域の人材のもつ教育力を生かした豊かな体験活動「みんなで取り組む食と農」に取り組んでいる。

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

農業体験活動を通して、身近な自然と積極的に関わり、自然の豊かさや大切さを感じ、自然と共存できる資質や態度を培う。

生きることや生命のすばらしさに気づき、自他の生命を大切に作る心を持ち、心身ともに健康に生きることができる資質や態度を培う。

地域の自然や生活、文化に触れ、地域を支える人々の働きや生きる知恵に触れ、地域の生活や文化を守り、それを受け継ぐとともに、新しい生活や文化を創造していくことができる資質や態度を培う。

さまざまな職業のもつ意味や価値に気づき、働くことのすばらしさを知り、自分の特性や能力を生かして自分にあった進路や職業を選択できる資質や能力を培う。

(2) 全体の指導計画

活動の名称

「みんなで取り組む食と農」

実施学年

全学年

各学年及び全校の活動内容

ア 1・2年 野菜の植えつけ、収穫作業（生活科学習農園）

農業改良普及センター及び農業インストラクターの指導のもと、ナス、ミニトマト、トウモロコシ、スイカを植えて、収穫までの世話をする。

今年度は、新たに加世田常潤高校と提携し、高校生と一緒に本校農園でのジャガイモの植えつけ、高校実習農園での農業体験を実施する。



イ 3・4年 田植え（かがやき田んぼ）

農業インストラクターの指導のもと、耕作、施肥、田植え、除草、収穫までの一連の作業を体験する。

（1・2年 野菜植え）

耕作から収穫まで大人の手を借りずに自分たちで実施する。

ウ 5年 さつまいもの栽培（学習農園）

農業インストラクターの指導のもと、耕作、畝づくり、植えつけ、除草、収穫までの一連の作業を体験する。

耕作から収穫まで大人の手を借りずに自分たちで実施する。

エ 6年 田植え（ふれあい田んぼ）

農業改良普及センターの指導のもと、地域の高齢者の手伝いをいただいてもち米づくりをする。



オ 全校 大豆栽培（植え付けから収穫まで）

農業改良普及センターの方や高田村づくり委員会の方から、大豆の種類や植え方、大豆（5年 さつまいもの植え付け）の効用、大豆から作られる製品についての説明を受けた後、約2000㎡に大豆を植え付ける。除草、収穫、加工までの体験活動を実施する。

カ 収穫祭（かがやきフェスタ）

各学年で実施していた収穫祭を一つにまとめ、村づくり委員会と共催で地域の方々を招待して、地域ぐるみの収穫祭として実施する。

教育課程上の位置づけ

ア 教育課程に「食農教育」の体験活動を位置づける。

イ 3～6年生は総合的な学習の時間、1・2年生は生活科と創意の時間をあてる。

2 活動の実際（ここでは「かがやきフェスタ」を取り上げる）

(1) 活動のねらい

- ・自分たちの手で大切に育てて収穫した作物を使った料理を参加者に提供し、地域の方々と一緒に収穫の喜びを分かち合う。

(2) 活動内容

収穫祭は、親子で作る「ふれあい料理」「昔ながらの道具を使った体験」「料理をいただく」活動の3部で構成している。

第1部では、それぞれの学年が「ふれあい料理」に取り組んだ。

- <1年生> 炭火を使った焼き芋、フライドポテト
- <2年生> 納豆づくり、フライドポテト
- <3年生> 丸ポーロ、白玉だんご、きな粉挽き
- <4年生> 豆腐づくり、おにぎり、揚げ豆腐
- <5年生> ソバうち、ソバづくり
- <6年生> からいも餅、ぜんざい

第2部では、村づくり委員会の方々に指導を受けながら、昔ながらの道具を使った体験活動等に取り組んだ。

足踏み脱穀機を使った米の脱穀

めぐり棒を使った大豆たたき

石臼を使った大豆の粉挽き

第3部は、親子で作った料理を参加者全員で味わいながら収穫の喜びを共有した。

当日は、地域内外から400名を越える参加者があった。焼き芋づくりでは、芋を濡らした新聞紙とアルミホイルで包んで灰の中に入れるとおいしく焼き上がるという指導を受けて、できたての焼き芋を



おいしそうに頬ばる子どもの姿が見られた。また、ソバ打ちに挑戦した5年生は、ソバを捏ねて延ばすのが面白かったと感想を述べていた。参加者の中には、子どもたちが農業体験活動に取り組む姿に目を細めたり懐かしさのあまり子どもと一緒にになって石臼を回したり足踏み脱穀を体験される姿も見られた。

子どもが主役になれるこの収穫祭は、村づくり委員会や保護者、関係機関等の理解と協力があってこそ実現できたものと感謝している。この収穫祭(かがやきフェスタ)が、地域と学校をつなぐ大きな架け橋となるよう充実した活動にしていきたい。

この収穫祭を開催するにあたっては、村づくり委員会との会合や保護者の話し合いを何度か重ねなくてはならず負担を強いる点もあったが、理解と協力を得ることができた。また、父親も参加をしたいという希望の声が多かったので、本年度は、学習発表会と抱き合わせて土曜日に開催するなどの工夫を行った。

3 活動の評価

子ども自らが課題を見つけ、課題を設定し、その課題の解決に向けての学習活動を展開していくために、子ども自らが設定した課題や学習計画、追求の過程を振り返り、評価し、改善を図り、子どもが学習活動を通して、研究したこと、感じたこと、学んだことに、今後どのように関わっていくべきかを考え、生き方を探るための評価を工夫する必要がある。

そこで、本校では、

- (1) ワークシート、ノート、作文、感想、絵等の制作物からの評価
 - (2) 発表や話し合いの様子からの評価
 - (3) 活動の状況を教師が観察して行う評価
 - (4) 観点別学習状況を踏まえての評価
 - (5) 年3回の「かがやき発表会」の実施による評価
- に取り組んできた。

4 学校支援委員会の組織と運営

(1) 支援組織メンバー

本校の支援委員会は、12名で構成されている。(校長、教頭、教務主任、総合的な学習の時間担当、用務主事、村づくり委員会代表5名、PTA会長、PTA副会長2名)

(2) 運営

学校支援委員会は、食と農の教育を推進するため年3回開催し、年間スケジュールと支援態勢の整備、家庭・地域への食と農に関する啓発、かがやきフェスタ開催のための計画・準備、年間活動の反省等について会合を行っている。

5 推進地域としての取組

町の豊かな自然にふれ、農業の持つ教育力を生かし作物をつくることの難しさ等の体験を通して、豊かな心や粘り強く物事に取り組む子どもを育成するために、町内の全ての小・中学校(小学校7校、中学校1校)を推進校とし、中でも特に高田小学校を中心校と位置づけ、各学年で自然愛護、農作物の育て方について学習するとともに、勤労生産活動等を通して道徳性等を培かうことを目指している。

また、農作物を栽培するための専門的な指導、農業機材や用具の使い方を指導してもらうために近隣の加世田常潤高等学校とも連携を図っている。

地域としての推進体制は、豊かな体験活動推進委員会を組織し、町役場農林課、農業改良普及センター、JA南さつま、道の駅と密接に連携し、企画から実施、事業指導まで協力を得られるような体制を整えた。

6 成 果

地域や関係諸機関の協力を得て、種まきから収穫祭までの農業体験活動を実施するなかで、子どもに次のような変容が見られた。

- (1) 身近な自然と積極的に関わり、自然の豊かさや大切さを感じ、自然と共存できる資質や態度を培う。

自分で作物を育てることで、収穫の喜びを味わうことができた。

灌水，施肥，除草，害虫予防等，作物を収穫するまでには、いろいろ世話をする必要のあることを実感することができた。

作物を育てる大変さを、失敗体験を通して学ぶことができた。

- (2) 生きていることのすばらしさや生命の尊さに気づき、自分や他の生命を大切にすることをもち、心身ともに健康に生きることのできる資質や態度を培う。

自分で育てる体験を通して、食べ物の大切さを身をもって知ることができた。

好き嫌いをなくし、そして「いただきます」の意味を理解することができた。

- (3) 地域の自然や生活・文化にふれ、地域を支える人たちの働きや活動を知ることによって、地域の生活や文化を守り、受け継ぐとともに、新しい生活や文化を創造していく資質や態度を培う。

大豆栽培や収穫祭を通して、村づくり委員会の熱意や努力に接し、地域のために頑張る姿を知ることができた。

めぐり棒や納豆づくり・豆腐づくりその他地域の方々の生活の知恵や苦労・仕事の楽しさ等に触れることができた。

- (4) いろいろな職業のそれぞれの価値に気づき、働くことのすばらしさを知り、将来自分の特性や能力を生かして自分にあった進路や職業を選択できる資質や能力を培う。

農業体験の中で、いろいろ説明して下さった農業インストラクターを見る子どもたちの目が輝いていた。

いろいろな食べ物ができるまでに、多くの人たちの愛情や苦労があることを知ることができた。

- (5) その他

農作業を通して自然を見つめる目が培われ、俳句の作品や読書活動等への取り組みが意欲的になった。

豊かな心や粘り強さが身につき、学力の向上にも寄与していると思われる。

自然を見つめる目（観察力）を培うことができた。

おわりに

学校と地域の連携により、どのような体験活動が子どもたちを豊かにするのか、試行錯誤しながら進めてきた「食と農の教育」であるが、地域の教育力に支えられ、子どもたちが自分で農作物を育てることの難しさや収穫の喜び、食の大切さ等を体を通して学ぶことができた。

「食と農の教育」の難しさは、自然が相手であり予定通りに進まないことにある。今後、研究を深めながら総合的な学習の時間や特別活動、更には教科との関連を教育課程の中に位置づけ、充実した活動ができるよう全職員で取り組んでいきたい。また、地域との連携をより深め、郷土を理解し、郷土を愛し、郷土に誇りを持つ心豊かな高田の子どもたちの育成に努めたい。